
黒い竜と白い竜

タカチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い竜と白い竜

【Nコード】

N8196Z

【作者名】

タカチ

【あらすじ】

俺は落ちこぼれとして生きてきた。きっとこれからも同じだとあきらめていたが、ある日一匹の竜と出会い運命の糸に大きく翻弄されることになる。

車は浮かないが、竜が飛んでいたりと、軌道エレベーターがあったり麒麟が駆けたりする世界で2匹の竜が作り出すストーリー。

出会う(前書き)

かなり前から自分の中で妄想していた物語です。

自分がどこまで続けられるか分かりませんが頑張っていきたいと思っています。

一応バトルも起こり、どこまで描写するか分からないのでR15をつけさせて頂きます。

出会う

朝焼けの時間が終わろうとしていた。

そして、夕闇の時間が目を覚まし身動きを始める。

（ああ……、そろそろ起きなければ。私の守るべき人が生まれてしまふ。）

まだ覚醒しない意識のなか最初に思った言葉がそれだった。

あの人の面影を見つけては喜びを感じる自分に憤りを覚え、それを望んだあの人には若干の憎しみをこめる。

まどろみの中過去を思い出していると不意に言葉が落ちてきた。

「起きたか？」

この領域に私以外で唯一入れる人物。

ここなら本来の姿で良いのに彼はまだ人の姿をしていた。

「今、起きる」

腹ばいになっていた身体を起こし、一息ついてから借りの姿になる。

「相変わらずお前の見た目は目を引く物があるな」

「私は白の方が好きよ。真っ黒だと気分が落ち込むわ」

「こっちは、こっちでめんどくさい事も多いがな」

互にくすくすと笑い、久しぶりの会話と楽しんだ。

毎回覚醒時にはこのようなやり取りが繰り返される。

「ところで、頼みがあるんだ」

いつも以上の笑顔を彼は私に向けてきた。

なに？と聞き返す所で、彼女の意識がぼやけ始めた。

「え……？」

「俺、少しやりたい事があるからまだ暫く寝ててくれない？」
へたり込んだ身体が言う事をきかない。考える事も億劫になつてくる。

（そんなことしたら、バランスが崩れて世界がめちゃくちゃになる……！）

「大丈夫だよ、30年ですべて片づけるから。すべて終わった後に、君を起こして上げる」

「こんな世界は替えた方がいいんだよ、一回リセットしよう」

日常

2月14日、明後日は俺の誕生日俺にとって人生を左右する大きな意味を持つ日だ。

普通の14歳はこんなに悩んでいないと思う。

皆生まれて直ぐか、15歳になるまでには加護を貰う。

貰わない人間もいるが少数だ。この少数には決して入りたくない。

加護を貰っていないからと言って、差別されることはない。公には……。

「ああー、俺の人生もここまでか……、短い人生だったなー」

学校の帰り道に独り言を言う。加護がないからと言ってあからさまな苛めを受けたことはない。これから加護を貰いクラスの子の守護龍や精霊を超える何かを連れてくるかもしれないからだ。だからクラスの皆は仲好くしてくれている。

しかし、明後日からは違う、確実に加護を貰えない。そんな弱い人間を中学生が放置しておくわけがない。

「くそー、彼女も出来ないまま終わるのかよ」

「そんな卑屈な奴に彼女は出来ませーん」

「どっから出やがった!」

こいつは幼馴染の清水ハルカだ、馬鹿力で成績優秀、見た目も愛らしく俺以外には優しい。まったくもって迷惑な性格をしている。

「はー、お前にはわからないよ。生まれて直ぐに麒麟に愛される人

間なんだからさー」

「そーゆー所でひがむのは悪い癖だよ？それに明後日までに守護が貰えるかもしれないし。」

「楽天的でいいよな。最近夢見も悪いし良いことねーな」

「もらえなくても、あんたには私が付いているんだから問題ないでしょー！！」

バシーンと背中を思いつきり叩かれる。

なんだこのツンデレは、馬鹿力がなければ萌の1つくらいさし上げるんだが。

「で、どんな夢見てんの？」

顔が赤いから照れ隠しがばればれなんだが……。

ここで指摘しても第二撃を食らうので指摘はしないでおく。

「ああー、女の人が寝てる夢、で俺に似てるけど俺じゃない男の人が俺を連れて女の人の方へ行こうとするけど、そこで起きちゃうみたいなの？」

「いやいや、全然意味わからないから。ちゃんと聞こうとした私がバカだったわ」

そこまで馬鹿にすることないんじゃないかと思いつながら話を続ける。

「女の人を起こさないといけないんだが、どうしても前に進めないんだよね」

「その人に見覚えは？」

「ない……、かな？」

「かなつてなによ？」

「寝ているからよくわからない。でも髪の長い人だよ」

その後はハルカが最近見た夢の事を話してくれたり、明後日の予定

をそれとなく聞かれたりした。

ハル力を家まで見送る。（俺の帰り道にあるため寄り道ではない）

一人になって夢について改めて考えてみる。

まず男の人は誰なんだろう？

俺の未来の姿？なんか違う気がする……、女の方はあの人の知り合
い？必死に起こそうとしてるしな！。

うだうだ考えていると家についてしまった。

「ただいま」

「兄ちゃん、俺今から遊びに行ってくるから。お母さんに言ってお
いて」

「おう、飯までには帰ってこいよ」

手をふり行ってしまった。

弟の幸樹は兄が見ても見た目が良い、そして、大精霊の加護を受け
ている。

精霊は加護を与える者にちょっとした幸運等を与え、大精霊はそれ
を他人にまで分ける事が出来る。そして、それぞれの特性に合わせ
た能力を使う事も出来る。

「俺も精霊で良いから加護が欲しい……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8196z/>

黒い竜と白い竜

2011年12月26日00時49分発行